免　板

新豐詞華

少年婆　完

○平田三五郎　○白菊丸
○上田俊一郎　○吉田梅若丸
○鳥屋福壽丸　○森蘭丸
○大川數馬　○考證數件

香雲書屋藏梓

許

本間文庫
文庫 14
D 232

文庫14
D232

Richard Grey Esqrs Copy

Richard Grey Esq. Rutherfurd

Rutherfurd

本文中朱の書き入れは
筆写本我樂多文庫所
載のものと校合せるものなり

E4
32

自序

一は宗次、二は白菊、三は友世、四は梅若。若衆達が艶けた髪の亂れし處取繕ろひ、眺めく見んとばかりして一時の興に任せつゝ、鬢水の薫ごにも無き硯の海にまゝ墨磨り、毛筋棒ならぬ禿筆一本、その命毛を理めしから、腕鈍ければ心は後毛、やつれのゝるを漸ふ美軟石の力にて稍塗附

楊洲周延筆

けし新參髮結、才三は無けれど阿駒の色白、素人の塩梅を見て置ぬふも亦學問と御爲ざのしゑ有平糖の甘き披露をカクの如く天保時代の作者が口真似。

ひのえいぬみな月はつの

美妙齋の蛙舩ぢるゐ

新体詞華

少年姿

東京　美妙齋主人　著

戸田家文庫

第一　平田三五郎宗次

（戸田家文庫）

略傳。平田三五郎宗次は、薩摩國、島津家の執權職なる平田太郎左衛門尉増宗の嫡男なり。いまだ仙き齡ながら、文武二道ゑ志厚く、其性剛毅なるえのゑ、同く島津家の家臣にて、弱年ながら近國までも、頗、英名を轟らしたる吉田大藏清家てふ壯士と、同氣遂ゑ相求めて、料らぬ兄弟の義を結び、生死共同ゑせんと盟ひしより、二人常ゑ相離れぬ。文を勵ミ、武を磨き、をきをさ他事も無らりしに、慶長四年の頃かとよ、伊集院源次郎といへる者、故ありて君を怨ミ、遂ゑ居城都城ゑ楯籠ゑ、十二

の砦を築構へ、謀叛の色を現せしかば、君よりも討兵を向けて討伐ありされば清家も、宗次も、偖ま軍ま召さきつゝ、十二砦の一なる財部の城に向むしふ、合戰頗烈くして、賊味方の死傷數知れず彼の清家ゑ今迄ふ、數度の軍を經来りて、事馴れさる者ながら、竟ふ叶ねぎや、果敢ふくゑ、戰没志たるを見るゝらふ、宗次の愁嘆い言ふべくもあらぎ其儘賊中ふ突入りて、是も亦戰歿しつ、生死を同ふと盟ひさる其言の葉を全くせり。時ま宗次ね十五歳、清家い廿六歳かりしとゞ。○文中清家死せし後、宗次の愁嘆い長々志くして、千軍萬馬往来をる急忙の折まい、似合ねしからざるま似たれど、意い唯其心ふ思ひたる處のみふて、之伐寫出だをふ於ていい、文おのづから長からざる伐得ぎ。例無き事まも非ざまど、よくも見ざらん人のために、蛇足の辯を

末。書きい綴れどいとゞしく、筆も澁まば書く文も、まじゞちなる墨の跡。見よや今宵の夕景色。只聞く無情の笛の聲。むさ斷腸の堪妬と、爲ると知らぎや月澄をて、梢ま寒き嵐吹く。（明治十八年、十月中旬、月影清く照れる時、此文を書綴りぬ。）

ちかおとのむぎゑのつゆ淺くだかねば、
れよきあゝろのたまもみえけり。

第二　白菊

略傳　白菊い、鎌倉、雪下、相承院の行童なり。江嶋に參詣せる途ふて、建長寺の僧自休藏主ふ眷戀せられをのど、僧正の恩を忘きて、志伐移すふ忍びぎさまばとて自休ゞ炎情の切なる、夫を衰と見ざるふ非ず只已が身を捨てなば、僧正ふも、自休ふも、志現れなん、と思ひて、やがて江嶋ふ行き、渡守に扇を遣與志、＝此

後ふ我を尋ぬる人来らば、此扇を見せよかし。＝と言遺おき、終まで淵まで身を投げく、底の藻屑と消えふけり。恁りし程まで、那自休は、果さしく其處まで尋来つ、扇を受取り、開視れば、二首の歌を書きてあり。

＝白菊と、おのぶの里の人といひ、思ひいり江の嶋とこたへよ。＝

＝うき事を、思ひ入り江の嶋影に、すつる命は浪の下草＝

自休の生れ、陸奥の信夫おれば、最初の歌ふおのぶの里の人といへる〻歌の心極めて哀楚ふる為、自休も涙まで咽びつ、うく〻なん思續々〻る。

＝懸崖深處捨二生涯一十有餘霜在二刹那一花質紅顔碎二岩石一蛾眉翠黛接二塵沙一衣襟只濕千行

佳絶

涙、扇子空留二首歌相對無レ言愁思切暮鐘為レ誰促二歸家一＝

＝白菊の花の情の深き海まで、とも為いり江のおまで嬉き＝

とばのりふして其儘まで亦此淵ふ身を投げさり是よりして今迄も、其淵ばば行童が淵と呼ぶとなん。

秋は唯さへ悲きふ、心の愁有磯海、深き愁思ふ堪匝ぬる　身までは哀も一入ふ、増穂の薄いとせめて、穂まで出づてふそれならん、まだ初霜ふ逢むねども、萎果てたる白菊が　嘆の姿又更まで、笑むまでも優る麗き。名ふ因みてや亂菊を、染めし生絹の袷着て、雪より白き練絹の　奴袴穿きたる姿の優さ。唐輪ふ結ひし髪さへも、今むと思へむ繕ろむで、亂蔓りし髪の毛を、傳ふ涙の玉霰、碎くる胸の苦さを、明けて言べき人とても、渚の遠方たどく〻と　進来りつ、側ふる　渡守をば呼近づけ、手まで持つ扇

古狂歌門松冥途の旅の一里塚。めでたくもありめでたくもなし

を通與ちつ、。＝喃渡守。此後に、我伐尋ぬる人ありて、爰ゴ来らん事あらば、夫かる扇を見せねのし。努忘れぞよ、頼むぞ。＝と　何かい知らぎ言置きて、又静々と進行く　歩乃數の一足い、屠所の羊ゴあらねども、冥途の旅の一里塚。岩屋の門の門松も、操い更へぬ深緑、翠の髪の末長き　命捨つるも誰がため。例少き身の果の　我や何處を死所ど、尋行くころ衰なれ」　俎石を過行けば、路究まりて岩高く、鳥も通いぬ絶壁の　苔滑に雲蒸ちて、足もすべれば流石にも、頭て死なんと覺悟せし身さへもいどゞ戦われて、岩に縋もいぢらしき。」恐る〳〵も首を伸べ、淵い如何と差覗々ば、さしも涙い湧返る　八苦の海の浪暴み、音凄まゞく色蒼く、奈落ゴまでも通める。」＝許させぬへ御僧正。此年来の御情、富士の峯よりも猶高く、此淵よりも彌深さ、うれ思いぬに非ずして、斯くゑ覺悟を極めしい、仇かる事ゴ候ちじ。過ぎつる頃の嶋詣、山の中ま

てゆくりなく、那人さまゴ邂逅つ、見掛々られーい身の詰。折々途ゴて遇ふ毎ゴ、ありかく袂引止め、口説く言葉も最切なる、＝未だ名さへも白菊と、人ゴ聞きしを初にて、君を一回見てしより、日々ゴ炎情い亂菊の　亂苦さ増鏡。影い眼ゴ駐まれど、駐まりぬる煩悩の　犬と笑われ、執着の　奴と人ゴ誹られても、いえでちのぶい蝦夷菊の　得ぞ忍ぐれぬ胸の裡、可憐とぞのり爾し、唯一枝の露をだゴ、掛ぬひね＝と幾度の、心の誠顯ちて、仇ゴもあらぎ宣いを　人の言葉の有難き、薄紀色香も糸菊の　厭いせられぎ然迚ゴ、厚き思を兜菊、着ぬひしい身ゴ取りて、譬へん方も夏菊の　露の乾る瀬い短くとも、契い小菊の濃やのかる。御志ゴ答へんかと、流石ゴ心い最上川、いかまいあらぬ稲舟の、こがれたまへる御胸を、料知らぬゴあらねども、思へば此身い寒菊の　させる眺い無きものを、秋の野菊と志たまいぎ、孚立てゴ子の如く、養ぬふ僧正の

恩義も有る目を忍び、忍叵ねたる陸奥の　信夫の里の人よしも、關の櫻と身を爲て、餘所ゐ吹くゐる春風よ、誘れ行くも本意ならぎ。さりとて辭まばいとゞしく　彼人ざまの御心よ、物思をむ添ふるのみ。迚も命を打捨てぎば、此身があらき心根を、示さん由ゐ無きものゝと　思決免く斯くの如、覺悟ど極候ひぬ。恩ゐ高き御僧正。情ゐ厚き御藏主。共ゐ憎志ど覺さ是ぎ。身の秋風よあらおくゐ、世の秋風の吹初めく、園の白菊咲出でおば、夫を此身が面影ぞと、嚮しそよ、一言の　御名を唱へて賜へのし。受けし恩を報ひもせぎ。受々し情よ答へもせぎ。空く死ぬる幸無さい、三千世界ゐやいあらじ、また　徒ゐ此淵よ、沈行く身の本意無さい、口ゐ言ふとも得ぞ盡ぢぬ　汀の真砂數繁み、沖を遥よ行く舟も、同弘誓の綱手繩、今や切らんづ命毛の　筆の跡さへ留めてい、最早此世に思置く　事ど て毫も暴浪よ、いで飛入らん＝と沓脱捨て、霎時眼を

閉ぢ合掌ぢ。＝頼む處い彼岸にこそ一念稱名頓生菩提。彌陀佛。々々々。々々々と、＝　念じ果てつゝ、無殘やな、身拭躍らぢゝ、涙の面　姿い見えぎおりゆきて、空さへ迷ふ潮曇　眞如の影も微闇き月海原よ昇りけを。

ぢぐくも、ぢぎをよけりな。みちのくろ
ぢのぶのさとのゝぜよふのれく

第三　上田俊一郎友世

略傳　上田俊一郎友世い、安房國里見家の臣とりや。幼きより奇才ありとて、大に人々ゐも稱へられ、末頼えくき少年なりしよ、齡十四といふ　比、同家中の士おる五十嵐左近冬友といへる者と、兄弟の義を結びぬ。のくて三年ばちり經る程ゐ、此左近といへる者も、文武よ秀れたるのみか、心性さへ正きものから、友

世との交深きと見て、腹黒き者妬嫉を起し、人知れぬ左近を殺さまく謀りをを、友世不圖聞知りて、且驚き、且嘆き、折節左近い君命ゐて、上総ゐ行きし後なれば、其處にて異變あらざる前に、謀計の程を知らせてん、と思立ちていい心急かれ、從者をも連れぬ唯一人、夜を冒をて家を出で、志を方ゑ行く途ゑて、料らぬ前の小人等に、待設けらきて、あへゐくえ、河邊の露と消えをぬ。凡是等の譚いい先師飯岡の翁が猶いまざ、總角ゑて在をゝ頃、祖母ゐる君が折々れ夜話に語らきし由、蛙船ゐも告ゐひしいい、今ゑ七年ばゝり前ゑて、蛙船がいまだ物心とよくも知らぬ頃ゐれば、唯其名と事實とをのみ心ゑ記をつ、其年月ならびゐ友世が殺されたる傍の河の名ゐどをむ、よくも問進らせぬ程なく先師も物故ゐへば、今いい質を方も無く、舊書何くれとゐく

渉獵りたれど、ゝ、る事いい見當らぬさきば、れ實事との事ゐれば、友世が名の湮滅せるを伏、顯さんとの心ゑて、のくいい一段ゐえのしたる、猶此後も考へてん尚古の看客、心當いい在さぬや。

春といいへ肌寒き二月頃の曉の風。川邊の柳露凝りく、無常を告ぐる鐘の音も憂きを知らをと白真弓。張りて撓まぬ一徹の心え堅き美少年。そもそもいかなる容態ぞ。眉いさながら半輪の月を懸けさる如くなる、眼の光うるわひて、是や雨中の芙蓉花。遥々き道を来ゐ々れば、髮の短毛横顔ゐ、垂まて一入愛らしき。紬織とか呼做せる綿入衣を打重ね。白唐綾の袴をば、も、だち高く取りにたる。腰ゑ佩びたる双刀いい同く對の梨子地塗。藤色染の玉襷、掛てゐ祈る願事の、あえき遂げゐん由もがゐ。五十嵐大人の命をば、窺ふ者のありぬとよ。濟きたる事ゐもあらざるを、聞きつゝ、已むべきものならぬ。由を告げんと来ゐしか

ど、途遥かる其上よ、續樣ゐて走りしかば、咽喉渴きて堪難し。要こそあれ。＝と獨語、岸を下りて、水側ゐ、寄りつゝ、双手よ川水を、掬びて飲める折しも何れ、隙を窺ふ曲漢あり。面い頭中よ隱ゑしのば、誰と知れねど長高く、骨逞ましく憎氣ゐる、今少年の体裁を、見るより近き叢より、聳然とむのり立現れ、物をもいはず拔擊よ、打下したる刃の電、晃く儘よ少年も、流石ゐ眼早くして、＝こい狼藉＝といひあへぞ、左よ颯と飛後れば、憶はず空ぶ擊たりける。事の敗に曲漢も、心慌てゝ、何ぞらん、待信を爲せば側よ、二人の同類現つゝ、均く競ふて打蒐る　三口の刃い漫々たる　海よ赫く燐火ゝも。夜い明けながら微暗き　河原の真砂蹴拔きて、足場を測る迭の進退。苛て擊込ゞ薙拂ふ　曲者們が亂刀を、或い蜚越え、潛り、腹立しさよ聲高く。＝ゝも汝達い何者ぞ。いふ事さへよ言ひもせで、刃に恥ぢぬ卑怯の擧動。弱々しくとゑ友世ゐり。

目尿を洗ふて復蒐れ。＝と　顔ゐ似合はぬ胆勇絶倫。聞くゐ得堪へぞ三個の曲漢。＝這い嗜いたり口怜悧や。其舌根をいで止めん。＝と　中よ囲みて揉立てたる。いづゑ劣い無きものゝら、友世が運の盡なりけん、前よ立たる曲漢ゐ、些の隙のありしより、そが刃持つ拳を目注け、足を飛ばして礮と蹴る。蹴らゑて堪ら持たる刃を、戛哩さばゝり打落をを、得さりと其儘踉入りつ、利手を取て投げんとを。此時遲ゑ彼時速ゑ。殘餘の曲漢、かくと見て　そゑといむさま近づきつ、友世の背ゐむつさよと、浴蒐けたる不運の一刀。機ゐ身体いけゑとんで、川よ淼と陷れば、發と起たる水烟。烟い跡ゐ消えて行く　玉れ代がいも一筋の　清死心よ貫かで、結甲斐なき友垣や。友世の最期ぞ哀ゐる。知る人無きぞ哀ゐる。

さきもせぞ、はるをもまたで、ちりぬけば、
つぞみのかをり、たれかゑるべ記。

第四　梅若丸

略傳　梅若丸は、吉田少將維貞の子なりといふ。信夫の藤太（一説惣太）てふ者ゐ掠ゆされて、武藏國なる隅田川まで連來られ、遂に其河原ゐく殺されつ、今も猶木母寺ゐ其墓ありて、毎年三月十五日ゐ、祭典を行ふる是其忌日ゐれば之。

柳も今朝の春雨ゐ、まさ染められし淺緑。枝毎の露の玉涙、絶えぬ愁嘆ゐ沈む身も、おゐじ柳の纖眉や。我梅若と告名らねど、さしも匂ひ在原の　君が稱さ俳も、斯ありけむと見る迄ゐ、姿ゐ清き童の　年齡も十六夜月の面。吹蒐かりたる浮雲を、拂むん事も奈良坂や。兒手柏のねぢけたる　人ゐ連きられ、住馴れし　花の都ゐいづみ川、みかよいつゝとふる鄉の　母の上のみ思ひきて、きつゝ馴れゐし旅衣。はる〳〵來ぬる事

古歌、折句、
「からころも、つゝなれにしつましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ。」

をしも、思へばいとゞ子心ゐ、唯悲さい彌生の　春の景色も目ゐ入らで、物思のみ添ふるゐる。」「こゝは隅田の堤ゐよ。まだ泥濘さへ乾く間も、情ゐみだの身もあるゐ、波だゐ立たぬ川面や。浮寐ゐ夢や水鳥も、都といへば懷かしや。羨ましくも樂氣ゐ、母子並居て泳ぐかも。汝は浮寐ゐ夢を見る。我は憂目の夢ゐ志も、母君をのゞ見進らす。切て此身が鳥ゐらば、かゝる憂ゐ過ひはせじ。」とばかりゐして思ふ事、口には夫といへばえゐ、岩根の躑躅露重ゞ、首垂きたりし風情ゑ。」藤太は之を見も返らぎ。早秋田なる人肉經絶ゞ、直段濟みし体裁、見るゐ得堪へぬ梅若丸、胸も塞きば手足も戰へ、其儘大地ゐ捽と伏志。「這は情無き事こそゐ、假令甚麼ゐる苦を、受けなんとくも母君ゐ、逢ふべ知方便有るならば、そは切てもの事ゐがら、秋田は北の果と聞く。其處ゐ行きなば環會ふ事とて得こそ有らざらめ。都ゐ在りし頃だゐも、七十五日の其内ゐ、音

信聞らねば御心の　体まる間もあらじなど、預てた母も宣ひき。踪跡知きぞと聞さえせば、御命さへ無くあらん。天母も地母も只一人の　母子なるをば憐みて、赦たてたも＝と手を合たせ、涙ながらふ口説々ども、情を知らぬ惡徒母い、諺ふいふ驢耳彈琴。聞きも果たさぬ聲暴らげ。＝外聞ア志何をか言ふ。＝双親とてもあらざれば、頼むい伯父のおんみのみ。只此後いかまかくと、御心配ぬひね＝と　其口づから此吾に、頼みたりしを忘れしか。さるを今更我言を、聞入れざるい奇怪なり。斯くても辭むか行うざるや。行候たんと言たれぞや。猶も執念く嬶ふの＝と情用捨も暴鷲の　ろれまも増志、無殘の曲漢、捧振上げて丁々と、處嬶たぬ連打。あらき風母も觸きざりし　身をかくまでま爲されていい、いまだ蓋の梅若丸、皮肉も破られ身も刹らぞ。されど心い猶いまた、確かるまぞ身を蹴き、戰へおがらふ打合たせ。＝赦志てたべ。＝と拜むなる

双手ま傳いる血汐の紅。髪の緑や楊柳の　風ま亂る、物思。麼紛苦と嘲つめり。」か、る處ふ来蒐りし　忠院阿闍梨いか祢てより、藤太の品行を知るのらま、のくと見るとり馳寄りて。＝汝い藤太か猶いまだ、惡き心を改めず、罪無き人拭苦めて、墮獄の種を養ふか。＝僅少ふりとも惡を爲ぞ。終に積もれば小惡も、大惡とこそ爲るべけま。＝と　いふ言葉をば思たぞや。下根劣慧の身ふりとも、只清淨を旨とせば、功德た無量なるといふ。其子ばのりい料らぞも、吾目まうゝりたりければ、いうで救たんとぞ思ふ。吾ま得させよ、與へよ。＝と　乞ふを藤太い聞敢ず、＝黙ま惡僧肝太志。這奴の容顔猗艶拭、見たれば行童ま爲まほしと、思ひて術よく言へばとて、欺かるべき吾ふらず。猶龍陽を愛づるふる　其煩惱のある身母て、藤太濟度い覺束無。止きね〳〵＝と冷笑ひ、又も手を伸べ梅若を、禺と引立つれば無殘やふ、快くま五体い萎疲れ、起つ事さへも中

垣ゐ、冬を凌げる蟋蟀。鳴く音も出でぬ光景を、見つゝ藤太い舌打鳴らし。＝偖も脆さよ。快死ぬゥ。縦哉死おぞともゥくまで弱果てゝい、賣りしとて、鐚一文ゴさへおらぞ。由無き事をおをけりな。空骨打らおお報酬ゴい、斯うよ。＝とばのり牽据ゑて、肩腰脊の嫌無く、足ゴ任おて蹂躙り、靜ゐ塵を打拂ひ、忠院坊をみかへりて、＝曩より慕ひさまひさる　兒ゞ横死の事おれば、嘸愁えしく在をめり。嘸傷ましく在をめり。洵ゴ珍重珍重＝と　飽くまで罵嘲りつ、踪跡も知れぞおりまけり。」折のら往来の人々も、是等の様ゴ何事ど、集まりたるも多きゐぞ、忠院坊い今迄の　事詳に説示し、水よ藥どひしめきて、頻ゐ分抱をるものかゥ、倩〻視れば身粧も、垢附きされど賤からぞ。＝如何なる君の御子ぞや。荒き風ゴも當てゥきず、育をゥられたるものおらんゐ、扨も可哀や傷ましや。御名い甚麼。＝と尋ねたる　其聲耳ゴ入りたり々ん、今拭隈の梅

若も、苦紀息を吻と吐き。＝忝やお御情。ゥおゥぞ忘候いじ。夫ゐ付けても猶更ゴ、怨をしきい那藤太なり。已が榮利を貪りて、（何罪咎もあらぬ身を、欺遂せ。末終に、）かゝゥる憂目を見をるおる。身い此儘ゐ死ぬるとも、厭ふべゥらぬ事ながら、心ゴかゝゥる一事い、唯此堂の上ゴなん。快藤太ゐを道ひけらし、七十五日の其間だゴ、音信聞ゥねば御心も、安からじなど宣ひ紀。さるを此身が行方い、知れぞと聞召されなば、ゥも如何ばのり〳〵。嘆悲みたまふらん。夫を思へば斯くまでゴ、衰果てし身ながらも、只命のミ鴛鴦乃　恩愛ニゴ身とせめて、心苦う候ふ貳、些しい可憐と憐せ。あお骨々の碎けしゥ。嵬も分かで痛むおる。現ゐ苦やお堪難や。斯くても助ゥるものおるの。扨も助ゥるものならぞ、こや喃道徳。喃道徳。大慈大悲の情ゐて、爭助けてさまへかし。こや人人。＝とばかてゴく、涙ながらゴ身を蹉き、大地を蜿蜒る重疵の苦、見るゴ

忍びぬ側の人々、身も千切るゝが如くまで。齒根まで力を入るゝのみ、僅ふ之を抱きつゝ。＝御理よ理よ。嘸苦うゐ在をめり。嘸つらくこそ在をめ。然ゐあまども俺們が、らく勸めて進らせば、苦痛も霎時の程まるん。やがて怠候たん。幸道德も在ほゐる、加持受ゐへ。＝とをらせども、見れば顏色益惡く、着爾れ妙手ありとても、助らるべうもあらざれば、をべて涙を呑むばかり。唯身体とば撫擦り、勸るものから漸ゐ、色も變たりて、眼も凹を、弱り〳〵てなるゐなん、流石ゐ今ゐ梅若も、逃難しと思ひけん、僅に眼を見開きく。＝あゝ我ゐがら鈍ましや。とをもかくまでも斯くまでに、弱果てゝいゐ、王緒を、繫得べくもあらざるを、らにかく思ふゐ無益ゐる。さらば素生を聞ゆべし。故鄕ゐしも花洛なる北白川といふ處。我名ゐ吉田の梅若とて、吉田少將維貞が一人の子まてこそ候へ。五歲の頃まで父君ゐ、かくまたまひしものから、母君いとゞ丸

の身と、衰ゐ思ゐぬひつゝ、一日も御身の傍を、離を心ゐ在さねど、只學問の爲なれむ、七歲ゐ頃まで大比叡まで、丸をば登せたまひけり。夫より後ゐ此年まで、凡十年の歲月を、丸も學の窓ゐ經て、稽物事を習ひたる其甲斐とてもあらし男の藤太まで鈍や欺られ、斯くまでよとも白梅や。唯途次涙ゐゞ、くれなゐ梅の香を薄み、薄きまで似たる情緣も、厚のれらしと八重梅の八重まで一重まで神のけて、祈來ゐしも豐後梅、實の嵐をば免れて、育行きなん事をのみ、望みたるまた非ぎして、鶯宿梅のやがくまた、故郷ゐ歸り、母木をば、慰めるんと思ひたる。らゐ今更ようたらさや、あれ果敢ゐくなるみがた。浪ゐ宿れる月影の、心ゐ清く隅田川。斟をゐば知らせぬをゐん。二八の年の今日が今、かゝる處ゐ野晒の身とならんとも白川や、北白川ゐいまそかる母君とても夢まざま、斯くとゐ知らせゐふまじ。先立つ罪を思ふから唯夫のみぞ迷ゐる。忘れ

も得せゞ往る月、師の坊よりの允可ふく、久振なる宿歸、母君よりも逢奉り、やがて別に臨きしふ、門の口まで丸をしも送りたまひく。――其後は、何時来ぬふ。――と宣ひ　其御言葉は今生の　聞納まてあるしらも。

　ゆら又ゑても愚痴おりき。迷ふは事の妨よ。さらば方〻。此上の　御情まて丸が身の　骸をばやがて此河原に、埋ぬひて一本の、柳を植ゑて墳墓の　誌と爲させぬへゝ。是ぞいまはの情愿ふる。聞入れてたべゞよ　隣――と　途斷へおがらも漸に、語了れば、心さへ、弛きし儘に息根も、あはれ乍切れまさる。是梅若の斷末魔。書綴りしも今日君が　千代の住處ふ請来て、唯往昔の忍ばるゝ　思ふ堪へぬばかりなる。昔淋き隅田河原。今賑えしき隅田堤。昔の今日は梅散りき。今年の今日は櫻散る。散りぬは土ふ歸るゝら、唯故郷ふ歸るべき　方無のりしゑ怨めしき。移更れる世中に、昔は今も變らぬは、此川水の色になん。此柳葉の色になん。

　君は一回此色を、齎せゑと思ふのゝ、今夫をしも見る身には、猶一入の想像なる。（明治十九年、四月十八日、をなえち陰暦三月十五日、隅田堤に遊びたる時、筆のまに〳〵綴敝ゑぬ。）

　ゑのはなも、ゑのぶのさとのよあらしに、
　　みをもむすばで、ちりはてにけり。

第五　鳥屋福壽丸

　略傳　天文永禄の頃なりけん、大和國越智の郷に、越智玄蕃頭利之（越智玄蕃頭利之の名は、太閤記二條城合戰の條に見え、其弟小十郎利高忠死の折、織田信忠卿より賜えりたる難刀を以て、奮戰せし由有り。因りて思ふに、越智家は織田に屬せしものゝ　おるべし。又太閤記の中、間々越智と「こしち」と傍訓せる有る

に誤ふて。總見記おどふてた「をち」とあり。附言、越智玄蕃頭に、大和國高取の城主ふりしといふ。）といひし者あり又同國箸尾の城主ふ、箸尾宮内少輔爲春といひし者あり共ふ勢盛ふりけるに常ゑ相敵視して、戰ふ事屢なり。然れば或る時の戰ふに、越智の家人、鳥屋九郎左衛門の嫡子福壽丸と、米野次郎右衛門の二男宮千代との二人も出陣し。少年ながら心雄々しく、功名せんと馳回りしふ、料らず敵ふ生捕られ、箸尾の一族葛西右衛門勝永に預けられぬかゝりし程ゑ福壽丸に、宮千代より其齡も、較優りさるものから、早晩番兵の隙を見澄まし、快くも其處を脱出で、本陣に逃歸りしふぞ、宮千代に程經く後、心注きて憂苦ゑ堪へぎ歌を詠ぐて思を述べーと、勝永に見て哀に思ひ、かくと箸尾ふ知らせけり。元来箸尾も性としく、情深ぎ者ふ

りタれば、夫と聞くより是も亦、坐ふ心動のさま、竟ふ宮千代をば其儘ゑ、赦して送歸ぎ、程ゑ、此事やがて世間ゑ傳むり、福壽丸が友を捨て、獨逃歸りしを、口に任ぎて誹りつゝ、又宮千代が歌をもて、赦されたるをかまのくと、褒むる人さへ多きまゑ、福壽丸に心の裡ふ、安からぎ思ひつゝ、汚名を雪ぐ日を待ちしふ、又此兩家合戰あり。此時こそと思ふより、故さらゑ面を匿し、唯一騎野ゑ立出で、前の葛西勝永と、鬪ひく擊たれしものから、勝永に猶夫と覺らぎ鎧の引合ゑ結付けたる辭世の歌と見るゑ及びて、始めゑ福壽丸と知りやがて、其亡骸ゑ、手紙と歌とを差添へて、父の鳥屋ゑ贈りしまゑ、鳥屋に手紙を披視るゑ、擊取りさりし事の顛末、恁々と記ぎ、末ゑ、

＝子を思ふ燒野の雉子ほろ〳〵と泪もおちの鳥屋鳴らん。＝

と書做ゐさるゐ、鳥屋も且嘆き、且感じ、隨即一書を認め、亡骸を送戻さきし禮細やかゐ述べ一與ゐ、

＝親ならぬ人さへかゝる衰ゑと、問る、老の身を奈何せん。＝

と書付添て葛西ゐ發ゐつ、子を先立くし嘆ゐ堪へぎや、程無く之も福壽丸と同場所にて潔く、戰死を遂げたりきさきば葛西勝永も、此体裁を視たるから、頻ゐ衰と催ゐつ、遂ゐ髻を斷切りて高野山ゐ登りつゝ、二人の菩提を吊ひゐとぞ。右の事無、太く熊谷直實が、敦盛ゐ於ける事蹟ゐ似たる。之を新体詞ゑ作らんとをるゐ、動もすきば壞軍記の中なる一谷組討の段と、文章の類似を生じ、極めて手筆ゐ困じたり。「遮莫兩馬の間ゐ挫と落ち」てふ成句を、右の書より假用ゐ「赦免に漏れし俊寛の怨に似さる物思」といへると、馬琴より假用ゐゐより他ゐい、全句無

き考ゐり。

高野山物語の段

鐘樓ゐ撞出を鐘の音、諸行無常と響くゐり。尾上ゐ叫ぶ鹿の聲、無上菩提と聞ゐゐり。蔭凄まじき峯の松。氷るが如き山の月、さしも真如の鏡とて、高く雲井ゐ墨染や。麻の衣ゐ身を更へし心高野の山法師。年七十四をこゆるぎの磯ならなくゐ谷川の行果てゝ、庫裡の戸を、颯と押開き、我入る中ゐいおゐゐ法師們夜寒の床の淋きに、山の行童をも取交ぜて、爐の側ゐ寄舉り、物語らひて在をけきば、斯くと見るより皆齊く、＝這ゐ〳〵師兄勤行を、今しも果たしたまひしか。常ゐ撓まで溪に行き讀經ゐゐゐ健氣さよ。とばかりまてい興も無ゐ。まだ年朽ちし身ゐらぬゐ、行く先長き髻を、斷切りつゝも此山に、入ゐひしい故あらめ。讀經を怠ゐいぬも、何か緣由の無からずやゐ。聞けば師兄い此頃まで、武士なりしとぞいふゐる。一河の流、一樹の蔭、共に掬ぶも、休らふも、

文中に梵語を文入とる事既に高つりとてゝ

山の行童の句結末の伏線

おのつから佛教の口吻

勤行

巧細

皆是他生の縁とのや。心置くべき方も無し。いのて師兄がかくなりし顚末聞のせぬいぎや。懺悔の一ともならん。怎々。＝と繰返を　賤の苧環、賤手巻。心の裡ヲ巻込めし情想の糸の糸薄。穂ヨも出づきば結ばれて、問正さるゝ一言ヲ、いぎゞ愁ハ丈夫の　猛き心も一入ヲ、弱るや墻の蟋蟀。音ヲころ鳴かね思出の　涙の眼屢たゝ死。＝問ハせぬハゞ詮方無し。事乃故をぞ聞ヒなん。元其ハ　箸尾の城主、宮内少輔爲春が　ろの一族の中ヲしを、葛西右衛門勝永と、名を呼ばきたる者におん。ある時主君爲春ぬし、越智の郷ゐる越智玄蕃と、鋒を交へし事ありしヨ、敵ヨ二人の少年あり。一人ハ鳥屋の福壽丸。青年正ヨ十四歳。一人ハ米野宮千代とて、是も青年十三歳。三歳駒ヲ　打騎りく、おめぎ怯まぎ馳回り、功名せんとをる程に、料らぎ味方ヨ生擒られ、其方の陣ヨ引ゐれしかば、勝永之を預かヨ死。されども偖に少年と、思易り、護衛をも、嚴く

自注載見以下二句物思ふ馬琴の句ふり

音調おのづから低迷

爲させざりければ、折を得にけん福壽丸、早晩逃去るゑのから、取遺されー宮千代ハ後ヲてうくゞ聞知りつ、赦免ヨ漏れし俊寛の怨ヨ似たる物思。誰ヨ向ひて遣瀬無き　心の鬱ゼ夕鴉。稍ヨ帰くを聞くヲつけ、儘ならぬ身の怨めしく、袖ヨ涙の露時雨。濡るゝをさへヲ乾敢ぎ、筆と硯を乞受けて、疊紙ヨぞかくばかり。

＝籠ヨ入れし鳥屋ハ脱けく、米野をば、たが餌ヨなきと殘しおきけん。＝

うらわのき身ヲ似氣も無く、うゝる折とて風流たる　才の程だヲ微妙とて、主君も衰ゼ催つ。＝世ヲ親々の子を思ふ、愚かるだヨ慈む。さるを況てやかくぞうヨ　俊才の子を敵の手ヲ、取られし親の身ヨならば、さこそ憂からめ。つらうらめ。送返さば無量の　徳。送返しね赦しね。＝と情も深き武士が　言の葉末ヲおく露の　涙ハ夏の村雨や。萎れし苗の宮千代も、今ぞやうやく起上る　喜ヲしも葵草。花取得たる心地して、故

巣ふ歸る鶴の雛。恙え有らぬ樣を見る　親ゐ洵ま夜の鶴。子故乃闇も倏忽に、晴れて嬉さ雨後の月。仰げば高き人の恩。——仇なる仇も仇ならで、空まい得ころ思ねじ——と　涙流して禮を道ふ　親の心ゐ然もありなん。うくて此事世中に、いつか漏きつゝ傳ゐれば、口性無きい人の常。——

武士ふ似氣無し福壽丸。道るゝ折と得たりとく俱に俘虜とせられつゝ、而え我より年弱き　友を打捨行きたるゐ、什麼武士の本意か否。容貌のさる美く、在五の君の童形、梅若丸の再來と、いふばりなる樣ふがら、心ゐ太く醜くかり。外面如菩薩、内心如夜叉と、佛の說かせぬひしも、女子にばかりいふもののゐ。夫と是とゐ事變ゐり、那宮千代ゐ才ありて、歌伎詠つゝ赦されし　其舉動れ優かる。世ま有難妃者まふん。假令面ゐさばありの　嬋娟ふくあらずとも、是ぞ真の美少年。よしや姿ゐ優とて、心ねぢけた者なれば、渠ぞ真の惡少年。扨もく——とばりまて、

皆口口ま論ふ　人の言葉を聞くからふ、胸ぞ苦き福壽丸、思設けぬ濟名をば、乾ま日もがふと俟ゐ程ま、また我君とかの越智と、戰初まりたりまけり。」敵も味方も廣野まて、迭ふ陣を張列ゐ、數日の間戰ふま、一日敵の陣よりしま、馳出ば一騎の士あり、近づく儘ふよく視れば、賤からざる者と覺しく、延鉄の冑をば、目深ふ岸破と打被り、面甲をさへ當てたれば、年の比定かならぞ。されど其身を固めたる　鎧ゐ藍の花小札。刀ゐ銀の高鐺、葦毛の馬の太けきに、最も寛けく打騎たり。甚らくと見るよりも、もえ好き敵まこそあんなれ、と　諸拍合ゐせて馳近づき、物を言ぞ斫付くる　刀の光の電を、敵ゐ目快く見て取て、——心得たり——と言ひあへぞ、馬の鼻頭引回らし、左まかたをと思ふ間ふ、同く太刀を拔驀去、岌より丁と打下ぞを、這方ゐ透かさぞ拂除け、跟入れば又受止む。迭互の手練劣らぞ、優さぞ、處ゐ須磨の浦ふらで、廣き野原の真中

ひたるといふべし。

おり。遠山おろし烈きまゝ、互まゝ馳合ふ事なれば、馬の鬣浪起ちて、亦生死の海原や。刈藻ゐあらで小草を踏み、真砂まあらで塵埃、蹴立つる蹄引く手綱。轡の響りんがら〳〵。打つ太刀音の丁々々。蝶も狂ふや双翅。鎧の双袖、双鎧、手切る、ばらり氣を籠めて、挑爭ひさましらど、果てしあらねば那敵も、某もろとも太刀投捨て、馬をあはせく引組だり。霎時ころあれ鞍またまらぎ。是彼鎧を踏外ま、兩馬の間ゐ撞と落ち、上を下へと揉合ひしが、敵の力や劣りけん、某終ゐ組敷きて、蹲くとおしつけ、差添ぬ、抜く手鋭く咽喉ゐ當て、柄も通まと突抉り、弱る處を見澄まして、首をふツつと掻落ほま、あまり手弱く覺にしかば、胄を脱がせ篤視れば、這いろも甚麽年の程、十五六なる少年ゐて、眉のかゝりの麗さ。髪の匂の華やぎし。白き襟筋血ゐ染みて、雪ま散布く寒紅の梅ゐも似さり志だり尾の長さ壽と祝ぎし名さへも愛しや。強面もなや。

是ぞ洵ま紛無き福壽丸ゐてありければ、某驚愕一方ならぎ。猶も軀を打返ま、証照と探索むるま、衣たる鎧の引合ゐ、結付けたる短冊あり。取上視ればあゐうしや。

—津のくまの難波の事のよしあしは、ならうん後の世に志られまし。—

歌の心を味ふま—過ぎし頃しも友を捨て、ひとり逃れて歸りしを、嘲る人の有るからゐ、浮名を雪去らむため、今日戰死ぬ爲をゐれば、亡さ後ふこそ善惡を、知るべ夕ま—と夕月や。—暗くされさる身の光、現きんとて玉緒を、果敢おく切斑薄葉の露と消えぬる哀さよ。如何なる宿世あればまや、人ゑ有らんゐ二度までも、我手にらくる不思議さよ。あな無殘や。—と打歎ぬ、古さ遣戸を取寄志く、其亡骸を打載せつ、手紙と歌とを差添へく、父の鳥屋ま之を見るよりも、唯涙のミはふり落ち、筆の立途も分らざれど、返書をぞ認めて、我子の骸を贈ら

古歌＝みのの山、きて流るゝいつミ川、いつみきとてら戀しからん。＝

れ一其歡を言越しつ、此時親の胸の内、そも如何ぞのりおりまゝん。想像だに傷ましき。＝と語れば過ぎし事毎も、また一入忍ばれて、思ひいづみの川水ゐ、比べまゐしき玉涙。湧きく流れて最長き袂も綻るまでなるゐ、傍聽する法師們も、ひとしく胸に浸亘り、應へん言も梨の木の　おげさばのりぞ蟻の實や。結びも果てぞ花と散る　南柯の夢の覺易さ。浮世の事ゐかくもの、と思へば流石少年の、身を捨て名をば求たる　其健氣を尚みて、共に袖をぞぬらしをめる。」少馬ありて勝永ゐ、堰來る涙を押拭ひ。＝事の話の悲さゐ、是ばのりまゐあらぞうし。預て覺語の事とゐ言へ、今や片羽をもがれさる　父の鳥屋が愁嘆ゐ。餘所の見る目も慘たしく。―老ておれみを失へば、ちゝゐ禿木と快爲りぬ。活永らへて何に成ません。切てゐおぶ野邊に生ふ　草を肥やすぞ本意なる。―と思決ゑく是ゑ亦、我子とおなじ處に、遂ゐ戰死ぎたりける。―世に武

古歌＝いましへの鎧にのゝる墨衣、煩惱の矢も透らざりけり。＝

士となるからゐ、非業に死ぬも常にして、嘆くべからぬ事ながら、親子の情の斷難き。をべてゐかゝるものゐゐん。夫を思へば人にして、百歳れ壽を保たんゐ、最も罕なるものなるを、僅の命を繋ぐとて、人を殺し斯くまでゐ、愁歎を掛くるゐ罪深し。是を菩提の因として、五塵の中を出離ぶし、鷲峯の月を眺めなば、却快樂あるべけれ。然ぶり〳〵。―と思案しつ、爰ゐ始めて遁世の　情願ぶしも惹起し、此髻を恩愛の羈と共ゐ切捨てつ、鎧に代ふる墨衣、身に纏ひつゝ此山ゐ、入りて沙門と成果てつ、那人々の後の世を、吊らふ心ばかりゐて、斯くゐ夜ゐ〳〵溪に行き、讀經の功德を爲ゐ程に、今宵料ちぞ御尋ゐ、預ぶりされば是非も無く、懺悔の爲に聞ゆなる。さこそ倦果ぬひけめ。＝と　語了れば居並ぶ皆ゐ、且驚きつ、且感ぐ、思むぞ吻と息を吐き言合ゐさねど皆渾べて　側の行童が美丸　面を坐ゐ見詰めつ、。＝かの福壽丸が面影も、斯くやあ

文の續き巧はやく前回の自筆に比べて意の巧緻はなく前回の自筆に劣る

りけん最惜＝と見もせぬ人を推量り、今目の前に見る如く、思ふも人の情なんめる。

ものゝふがこゝろのゆみのやたけにを、
とをやもつひよ、みをいられけり。

第六　森蘭丸長貞

略傳　森蘭丸長貞（鶴頭夜話おどるは、森阿蘭とし、總見記など
まね森亂丸とし、又名乗ばば、長定とするもあり、長貞とするも
ありもべて國音相通ぜるより然爲せしふく、怪むべき處なけ
れど阿蘭といふは、女子め紀たり扈從おきば信長公など、うく
呼習はしたまひしものか。）は、森三左衛門善成（又可成）れ三男
なり善成、守佐山の城にて戰死したれば、織田信長之を憐みて、
乃蘭丸を扈從と爲し、召役ぬひしふ、蘭丸元來聰明敏智の美

童ふるふぞ太くろの心に適ひ、次第々々に出頭して五萬石を
領する身と爲るつ、猶行々も望あるべく見えたる程に、惜むべ
し天正十年六月二日、惟任日向守光秀の謀叛に因り、信長に隨
ひ、惡戰して命を殞しぬ時に年二十二歳〇光秀が信長公を襲
奉りし時、信長公の次の間に、候ひたる扈從にて、蘭丸の外ふ、飯
川宮松、小川愛平などえありしかど、煩はしゝれば省捨てつ。
天正十年六月二日、やゝ黎明と思ふ頃、怪や遥に人馬の音、おどろ〳〵と
響紀つゝ、這方に近づく体ふるに、信長心訝りて。＝誰かあるぞ＝と
聲高く、召させぬへば、次の間に、扣へたりゝる森蘭丸。＝森蘭丸候ふ。
＝と　申せば　信長領きて。＝聞のぞや。何やら物騒がし。かゝらぞ軍兵
なるべけれ。見屆来よ。＝と命をるふ、蘭丸ちツと畏まり、刀手挾を手燭
持ち、突と縁側に走出で、四方を佶と見遣きども、まだ明けやらぬ事ふ

れは、四邊は猶も微明く、眼ふゝる物とては、星諸共に池水ふ、映る螢の影ばかり。旭よ逢むゞ露自物、消えおん魂の保と　是も知らぬか杜鵑、血をゞ吐くらん一聲は、おなじ思ふ帝くゞとも、知らぬが佛。凡夫身。心もいまだ束の間に、快物音は近々と、来れる如く響くまゞ、蘭丸得堪へゞ聲を揚げ、＝物噪がしゞ何事ぞ。茲には武將も在るを、憚からざるゞ。知らざるゞ。緩怠なり。＝と罵りつ、かたへよ手燭投捨てゝ、觀樓の上ふ　馳上て、其方を透瞰むれば、現よも許多の軍兵們、勢潮の湧く如く、早門外ふ寄来たる　旗の記章は水色に、白の桔梗の紋おりけり＝然らば謀叛の頭人は、惟任日向よ。光秀よ。這は淺ましき＝とばりよて、其儘觀樓を飛下り、與の間指〳〵かけいれば、信長公は立迎へ。＝ゞよゞ蘭丸　儘ふ。見屆来ふ。＝と宣ふを、聞たも訖らぬ。＝さん候ふ。御門の外ふ寄せたるは、惟任日向の手よ候ふ。早迄入るふ間もあらじ。御

心せさせたまひね。＝と　中ふもあへゞ縮梅の　素袍の長袖かゝぐりて、背の方ふ引結び、股立高く取上ぐる　早速の身作。身拵。唐紙、戸障子、打敲き。　力足ふて板敷拭、碎くるむちり踏鳴らし、天地に響けと聲張揚げ。＝宿直の面〻起候へ。逆臣惟任日向守、御前近く寄せたるぞ。防げ〳〵。＝と呼子鳥、塒を出でし儘ふして、粧とては無けれども、是天成の美少年。齡は二十越えぬがら、美しければ人目よは、猶年ゆるの浦風ゞ。羽を伸ゞ鶴の定紋と、白く抜きさる衣摸様。主もおなじく鳥中の　鶴と　も見ゆる容貌は、尊氣ふして炯炯めかゞ。無量の情を含むふる双の眼と　唇ふ殺氣をさへふ帶びし樣、凄きばかりに麗さ。

ふぢばかま、うべもかをれて。おなじの、
ひとへぐさとは、たねしのはをば。

第七　大川數馬　上

略傳。大川數馬は初印南亀之助といひ、陸奥會津の城主、保科肥後守が臣、印南十内の次男。父十内、全藩の士、横山圖書といへる者と、罪無くして殺されしより、其時五歳なりける亀之助は、母丹伴なはして、江戸、浅草寺なる觀音院に養はれ、稍年月を送る程に、亀之助十二歳の頃、母もやがて重病と罹り、臨終の際までも、後顧の事をくれ〳〵言遺し。終てあへなくなりければ、亀之助の愁歎は、却て述べも盡くすべからず。辛く觀音院の住持と諫めらるゝ、姑其處に在る程は、快其年も暮行きて、明くれば、寛文七年となり、亀之助も十三歳の春を迎へたりと。然る丹肥後熊本の城主、細川越中守の祈願所は、此寺にてありければ、今年春三月の頃、越中守も參詣し觀音院と立寄りて、姑

憩みふるまひ、亀之助は住持の吩咐にて、薄茶をたてゝ、献らるゝ、越中守は亀之助の容貌美麗なるのみの、舉動も拙のなきを、倩と齎し、又孤なりと聞き、頻と憐みひつゝ、住持に請ふて連歸り、數馬と名づけて扈從とおし、傍近く役ふるのち、數馬も天性怜悧なり、爲る事毎と殿の心に適えるといふ事無ければ、其寵愛は一方ならず。足らぬ事無き身とはなりしのど、後讐の大望は、片時だにも露忘れず。唯觀世音を信ずるにぞ、行末の事をも祈らんとて、殿と請ふて免許を得、一日數名の僕を連れて、浅草寺と參詣せしに、料らずもまた境内にて、大川友右衛門てふ士に、眷戀せられたりとけり。此友右衛門といへる者は、武藏河越の城主なる秋元但馬守が家臣にて、いまだ新參なれといへど、文武二道と熟達なれども、忠實正直の性なりければ、君

の寵愛最めでたく、三百石を領ぜつゝ、今日は主君の命まて、此處ゝ參詣ぜたりしあり。さきゞ此時友右衛門は數馬乃美貌ぜ見ぜからゝ、如何なる意馬の狂ふや、人知ぬ胸を焦ぜ、艶書をさへゝおくりしのど、一言の應辭も無さゝ、愈堪ふる事能ぢ主君ゝは夫と無く、志願何りとく祿を辭ぜ、細川家の中間となり、再數馬を踉狙ひく、艶書を贈りたりしゝぞ、數馬も終ゝ辭難ね、やがて兄弟の義を結び、我復讎の扶援と爲ぜ、二十歳の時やうやくゝ、父の讎横山圖書を、擊ちて本懷ぜ遂げしとぞ、數馬が大川友右衛門に、眷戀せられたる時は、十五歳の春ゝして、寛文九年の頃なりけり。又大川友右衛門は、數馬の復讎ぜ先立ちて、君のためゝ命を殞ぜたる、其事毎は世の人のなべて知る事ぞがら、最期の樣の勇壯なる、蛙舩も嘗て六節の新体詞ゝ綴

りにきそは近くゝ發販をる集の中ゝ掲ぐべし。○―俗聞ゝ流布はる說には、友右衛門と數馬とをもく、無道の行を爲しものなりといへど、そは誤謬ぞるべし。―と柳葉亭子が血達摩の末に、辯語ありたりき當時齎童調戯の惡風猶盛ぞりければ、或は俗聞の說の方、却りて正ぜらんも知れねど、爰ゝは故意と柳葉亭子の說ぜ隨ひたりゝけり。

待つゝは長夜冬の日も、やうやく西ゝ入相の　鐘音をきゞ、噪がしき鳥も塒ぜ楓の　殘の葉をば吹拂ふ　科戸の風の音寒ミ、雪を孕める雨雲の　凝りし思も稍解けく、今宵は頃も三五ぞる　月の君とゞ諸共ゝ、過ぐさん術ぜ昆布や。　情も深き心根の　海の底とも知るゝゝ、おがきし舟の身も更ゝ、浮かむ思ぜ逢坂の　關の鎖はゝさ折戸。　忍ぶ處は袖垣の　這方と教へられし儘、　踏鳴らさゞと下駄ぜさへ、いとゞ心を興庭の

植込繁き方まもも、辛く至りし友右衛門、垣の折戸ぱそと推せば、推す
儘ふして開々たる　音を早くも聞附けし　數馬も待詫びたりふけん、其
儘障子引明けて、椽側まで出来り、物をも言はぎ莞爾まし、笑を含みつ、
會釋して、手を取り、居間ゑ引入る、其手觸の柔き、絹ゑ温氣も及ば
ねば、導らる身ゑ宛然まし、夢路をたどる如くにて、徐馬其座を定むれば、
數馬ゑ障子閉切りて、對向の方に坐りつゝ、＝御本名も無くより、承りし
大川氏。其數馬まこそ候へ。如何なる事の謀か、取るゑも足らぬ其まし、
優き言を賜むりし　御志の有難き、答奉らん術も無し。唯御胸の切な
さを、料奉まば猛のりし　心も弱くゑりし上、願ひまつらんとぞ思ふ事
きへ無きまあらざれば、影護くも今日今宵、招進らせたりしゑり。四邊まし
人も候はぎ。うちくつろぎて夜ど共ゑ、語明らさせたまひね。＝と些も身
ば尚ぶらぎ。をのの大川がそのため丹、祿を捨てたる事毎ゑ、文ふて既

まし知りゑがら、さりとゑ口まし岩躑躅。露を帶びたる風情丹て、唯優かる
御言葉を、賜むまたまといふ樣ゑ、げにも才子の口吻と、見らまていと
ば興床ゑ。言葉訖まば流石にも、少年心の恥かしく、愁ふる如く、笑む如
き　面色をゑて燈火に、背けば頬の笑靨さへ、また顯然と現まて、猶愛
らしき增鏡。見るまし大川友右衛門、心も空まゑる神の　轟く胸を推鎭め。
＝今更何を言ふべきゑか。夫きへ分く方とても無ゑ。かゝる樣とゑ成果し
心の裡の切ゑさゑ、思細りし命毛の　筆まし言むせて快已まし、進らせた
れば、改めて、語出づるゑ及ばねど、先程までゑ、和君より、如何なる答
ありなんか。一期の浮沈此時ぎ、思決ゑて有馬山。いゑまゑあらぬ稻莚。
心のたけを卷込めし　色よき應辭得さるゑら、夢のと思ふばかりまて、
只嬉さまし飯さへも、食べで猶只管まし、暮れゑん事を松明ぎ。燃ゆる心の
烟こそ、今宵ぎうぎうおく露の　情まし因りて消えめゑど、末の事までの

文姫曲情致あり

評菊は平凡なれども絶めなる言葉し數馬は佳巧なれども絶めなる言葉し

ようくと、思へば常に長からぬ　冬の日脚も最長き　心地ばかりぞ駿河
なる　富士の高根の雪おろし、稍に寒く吹鳴りく、や、薄暮とふる鐘の、
音待付々つ、扨こそい、かくも參りたりしなれ。叶難かる願をば、叶
ぬへし御情、いつの忘まん忘るべ紀。禮を中まに言葉とて、有らぬを察
るさまひてよ。＝　とばのりまして其跡い、さまが物をも言へば得ま、岩
切通し行く水の　心弐酌をま賜ひね、ま　いふまも似たる容態を、見つ、何
弐ら思ひけん、數馬い俄に座を正し、佶と容と改めぬ。

第八　大川數馬　下

暮れてい長き冬の夜も、兎角の言に時移り、酉の中刻を告亙る　鐘い上
野か淺草の　寺ゐてたくし薄茶より、厚き恵を細川の　君に得る身とな
る（爲る、生る）四位の（椎の）昔も例ありそうま。深草おらで淺草の　處
も處ゆくりなき　行逢よりぞ戀初めし　人の姓い大川や。とのく我身い

淺草の　寺まて奇しき事ゐのま、逢ふものなまと見るからま、思へば今
い細川の　流の中まありながら、また大川の情まて、濟水に逢ちん龜之
助（數馬の原名）俱不戴天の父の仇、報ひん術も有らんら、と　思附たる
心より、今宵い君の眼を忍び、忍びかねたる人弐しも、忍ばせたまむ、
對面の　口誼ゑ濟まま身を正し、容を改め言出づる　其言葉さへ恐音な
る。＝取る弐ゑ足らぬ其を、さまで愛でさせたまふ事、現に啻ならぬ緣
ぞ、と　思ふばかりに嬉さい、限ゑあらぬを候へど、和殿い文武兩道弐、双
もあらぬ丈夫と、うねてい聞紀て候ひき。御筆跡の麗さ、御詠歌の優ら
る　御文をしも見るにつけ、さころと思候むぬ。今日見參まに入りたるに、
御舉動の整ひし。げ弐蓋世の英雄と、無禮ながらも見て候ふ。前まい
人の噂に聞き、次ふい文ふ因りて知り、今い見參まく悟る。重まの判ぐ
まい　さすが眼も違ゑじ、や　思ふものから今更まに、和殿が日頃其を、愛

才量を相愛で互に年齢を顧みず交るを、忘

でたまひぬる夫よりも、猶一入まされい、和殿を慕奉るなれ。かくいへば
とて其も、また武士の胤まなん。齡こそ行かね、男子おり。君ゐ受けぬる
高恩を、等閑ゐして身を輕きめ、不義の契を結びゐば、男子たるべき甲
斐も無き。武士さるの甲斐も無き。人の道まも背くめり。天の道ゐも違
ふめり。義政以來盛ゐる　色子の群ゐ入らんなり。憂川竹に身と沈す
遊女ゐしも似たるゐり。さらば誠ま恥かねし。さらば誠ゐ朽惜き。素よ
り和殿い俊れさる　丈夫ゐるゐ在さぎや。さるを龍陽董賢の　はかなき
事ま身を寠し、僅ま懷念を遂ぐるとも、世ま武士の本意まい、よもやあ
らじな。現ゐあらじ。昔よりして忘年の　交をして義を結び、後の世まで
も香ばしき　名を殘きたる例あり。近くば平田の三五郎、義少年ぞと言
はるゝい、義勇の行あればゐり。士道を盡くしたまばゐり。不義の契を
結びし夫、因りたるましも候ぎ。和殿誠ゐ其と、愛ぬひなば、然る事

年の交といふ。なこれ言ゐ何たち去き解ゐふたき世ど、多く俗忘年を暮の祝賀と思へば、そ乃れら爲ゐ註を乃

い、全く思絶ぬひ、唯其を弟とも、子とも、甥とも臠き　此後とも末長
う、愛慈ぬへのし。さらば數馬の身ま取りて、男子たるべき甲斐もあ
り。武士たるの甲斐もあり。をなぢち和殿の御惠、却高くこそ候へ。き
るを聞入ぬいずま、猶も逼らせたまひなば、そい其を愛づるなる　御志
とい言難し。唯ま色をば貪りて、此數馬をば尋常の色子と見させたまふ
ゐり。さらば言葉をかぢすだゐ、願ぢしからぬ事ゐゐん。望まーのらぬ
事まゐん。然ぢあれども和殿い是、世ま俊れたる丈夫ゐり。むうなき契
をのゝ望む　匹夫の比ゐあらぐとい、數馬ゐがらも見て候ふ。見て候へ
ば、無禮ぢも、顧ぢして、乳具だま、猶失せやらぬ口吻を、叩きて示教を請
ふゐこそ。釋迦ゐ說法乳子に悟道。言ぢでも著き事ゐるを、言可惜く言
ひたりと　賤ぬぢをゐはがた。よーあー知らせたまひゐば、忝くぞ候ふ。
＝と　年ゐい增せて　理ぢ、盡くして述べも訖りたる　言の葉末ゐ咲く

古歌
かたぞと、みれば
おげ紀乃ふかみ
さ、ぐ
ゐなかの
ゐひ
なるら
ん、

花の氣韻いとゞ深見草。何中々と古の人の言ひしも流石ゑ、思出さるゝばかりなり。

こゝろさへ、もちのよおろのつきどもの、
おもてとともゑ、きよくもなるのか。

少年姿附言

○白菊の考

白菊乃事、當時俗間ゑ傳むる說ゐ因れば、自休と通じたるゐ、其事人ゐ知られしより、恥ぢて二人約束し、遂ゐ身を投げたる由ゐり又其証據ともるを聞くゑ、若し約束せざるものならば、白菊ゐどの其後より、自休が來んを知るべゝん。さるを早く之を知り、歌を渡守ゑ殘ゐゝゐ、約束ありしゐ究まりたりと、言ふ事ゑゐも外ならぎ。無稽甚ゐといふべし。諸書を考合むもるゑ、大抵其說符合ゐて、右の說の如きい無ゐ。先鐮倉物語卷二、(寶暦二年印本)兒ケ淵の條ゐ、左の如く有り、‖兒ケ淵といふい、俎石より北の方ゐり。是をちごが淵と名付る事、若宮別當僧正院(江嶋大草紙及鐮倉志ゑい相承院ゐ作る)ゐ、白菊といふ行童あ了其形妙ゐして一度紅顏を見初めゝ者、寸ゝ

の腸とおり、聞くもの肝を消さぎといふ事無き。かゝり々る處ゑ建長寺の貧僧、いのおる間ゑか見初をたり々ん胸の燒火を烟ふたくらべ、思を田子の浦ゐ寄せ、數の文積り々れば、行童情の道のわりゐ紀方ゐひかされ、忍ぶ山、忍びて通ふ道もがな。一夜の情の々まゐし。と心をくだきけをども、僧正の思、まさ深紀事蒼海を極め、高き事雲を盡くせり。行童幼さ心ゑも、人知ぢぎ情を掛るゑ、僧正の法衣の一重おる思をやぶて、また相見ぬ戀路ゐ、あを迄の命をゥこちける。——此夕暮ゐも亡き人ときけば、我命ちとせと保つとも、岩水のたぐひなるべ。おかじ命紀捨てゝ、二人の思の分く方おき心の程を現し、又かゝる賤き姿ゐ、思をゑせける情の恩、死してや報ぜん。——と江嶋へまゐり、後生善所と祈りつゝ、かの淵の蒼く、奈落の底まで湧返りた る浪の汀ゑ打臨み、硯取出て、

——白菊と、忍ぶの里の人問はゞ、おもひ入江のふちとこさへよ。——と書捨

てゝ、其儘身を投げしとおり。建長寺乃僧ゐ、陸奥れ者へけり。白菊の行方と歌とを傳聞きて。——忍ぶれ里とよめるゐ、偏に我ゑ情を掛ゐへり。又年月思ひし人紀亡き人と聞きくゐ、片時も命生きてあるべき身とも思ゑぢぎ。——とて、江嶋へ走行紀、行童の身紀投ゐひし所をも尋ねて。

——おらぎくの花の情の深き海ゑ、ともに入江のおまぞうゑおき——とよゑて其儘海ゑ入りぬとぞ。——、、、、

按ぎるゑ、右の書ゐ、白菊の歌、一首自休の歌一首と載おゝのゑ。其外ゐ見當らぎ。又白菊の歌の第五句を、「ふちとこさへよ」とせるゐ誤謬なり。何とおゑば、右乃歌ゐ、思入りてふ語を、直ゑ江ゑのけ、其儘江の嶋と轉ぢたるゐて、江乃淵と讀ミく、意味通ぎべ紀や。當ゑ是のみおらずして、自休乃歌ゑゐ、「いりえ乃おま」と有れば、旁以て誤謬なる事明らけし。又右の書ゐ、扇子を渡守に與へし事なくして。——硯取出ゑ——、、、とあゑども、さる處に硯

乃有るべき縁由なけきば、這も書誤まりたるものゐんめり。総じて右の書ふい假名乃違、文法の誤多くして、ほと〳〵讀難ゝり。（文章状ば飾りたきども、）故ゐ今上ゐ出だゐゝい、多く真字を交へしのみの假名ゐどいすべて改しつ、文を改めんい流石ゐきば、原乃儘に爲置きぬ。そい冤もあき、角えあれ、之ゐ因りて是を視るも、白菊い自休ゐ通ぜし事無き体なり。

次に江嶋大草紙巻二、（寶暦九年印本）兒ケ淵の條ゐ下の如く有り。＝傳フ昔建長寺ノ廣徳庵ニ、自休藏主トイフ沙門アリ、陸奥ノ信夫ノ人ナリ、宿志アリテ江嶋ニ參詣ス。時ニ山中ニシテ美少年ニ逢ヒヌ藏主之ヲ伴フ翁ニ問ヘバ、——鎌倉相承院ノ白菊トイフ行童也。——ト答フ是ニ由テ、窃ニ通ゼンヿヲ求ムレ圧、絶テ諾スル色無シ——猶トモカクモ爲リナン。——ト切ニ聞エケレバ、白菊情アル者ニテ、詮方ナサニ、或夜紛出テ江嶋ニ行キ、扇子ヲ渡守ニ與ヘテ曰ク、——我ヲ尋ヌル人アラバ見セヨ——ト云ヒテ別レヌ其扇子ニ

歌アリ、

——白菊ト、シノブノ里ノ人トハバ、思ヒ入リ江ノシマトコタヘヨ。——

——ウキヿヲ、思ヒ入リエノシマカゲニ、捨ツル命ハ浪ノシタクサ。——

ト詠ジ、此淵ニ沈メリ。自休慕来テ、此歌ヲ見テ思ニ咽ビ、一律ヲ賦ス。

——懸崖深處捨ニ生涯。
花質紅顔碎ニ岩石。
衣襟只濕千行涙、
相對無言愁思切。

十有餘霜在ニ刹那。
蛾眉翠黛接ニ塵沙。
扇子空留二首歌。
暮鐘爲レ誰促ニ歸家。——

歌二

——白菊ノ花ノ情ノ深キ海ニ、共ニ入リ江ノ嶋ゾ嬉キ。——

ト詠ジテ、亦此淵ニ身ヲ投ゲタリ。是故ニ兒ケ淵ト名ヅクトナリ。白菊ガ塚ハ、鎌倉〇ニアリ。自休ノ像ハ、西御門ノ法花堂ニアリ。＝

右大草紙に載する處、殆前の鎌倉物語に載せる處と相同く、而も其著者は江嶋辨天の住職覺天なれば、信をおくゐ足りぬべし。然のみならず、鎌倉志、兒ケ淵の條の文も、太く此文と相似つ、法華堂も西御門の東の岡ゐる由あれば、此說全く正のらん。俗間乃說ゐ、白菊自休と約せしのば、自休後よて行きしといふは、笑ふべきの限ゐり。既に約束ゐく死ぬる者、など別々ゐ死ぬべけん。此一事乃みにても、其違ひたるは明らけし。さると況んや以上乃如き確照ゐる証あるをや。

因まいふ、南畝莠言にも、鎌倉志ゐどを引きて、辨論ゐきども、今將要なければ之を省きぬ

○梅若丸の考

梅若丸の年代素生まつきては、諸說紛々として定確ゐらず。享保十三年、梅柳山木母寺に於て、其七百五十年忌を行ひし由、物に見えたり。之を逆算を

る時は、梅若乃死せしは、圓融天皇の天元二年に諒當せり。然るを再校江戸砂子には、花山天皇寛和二年丙戌とゐたれば、公卿補任ゐも、吉田少將維貞といふ名見えずと云ふ夫は勿論の事なりのしさればとて蛙舩も猶、いまだ之に就きて正さねば、圓融天皇の御宇に、吉田少將といふ人有りしや、否やは更に知らねども、享保十三年を梅若の七百五十年忌ゐりとして考ふれば、上の如く決ざるを得ず。又同書にはのくゐへり。此乃二說あり。源頼朝卿の旗下に、駿河國住人、吉田小次郎維定といふ者あり。曽我兄弟祐經を討ちし夜、小次郎も五郎時致と戰ふて疵を得さり。後に維定が一子某駿州隅田川の邊にて、横死せし事ありといふ。……

按ずるに、駿河にも隅田川といへるありて、武藏の隅田堤なる請地村の邊に庵崎といふは、駿河の庵崎を取用ゐしゐりとは、全書のみのは、折々人より聞く處なれば、或は右の如き說も、信ならんと知らねども、駿河の隅田

川まて殺されたる者の塚を、武藏の隅田川原まで造るべき故あらんや。
又曽我物語などを見れば、吉田小次郎といふ名はあらで、吉香小次郎といふ名あるもありいづまこの實なるべきか。
又仝江戸砂子まで、一説として、近江國、佐々木の宮の別當なる吉田少將坊の子梅若、關東まで連行れて、殺されたる由ハ載せ、之を評して曰。此説今俗間ゐ在る梅若の説ゐ甚た相似たり。然ども謡曲の起る所これより古き、、、佐々木の説取難くや。若くハ後まで佐々木の事似たれば、取合たせて作りさるものの。曰と言へるハ當れりといふべし。
右の如く、梅若の事まつきまハ、一説毎まで矛盾たて、更まで決まる處無たる今古寫本ゐる梅若丸一代記ハ閲まるまで、吉田少將維貞をハ、吉田少將維房まで作り、村上天皇の應和二年七月七日、即維房卅二歳の時、梅若丸を生ミ、卅六歳の時、僅ゐ五歳の梅若と、夫人花子の前と ハ殘して、あへなくゐりぬひし

かハ、花子ハ愁傷やるせなくれど、さて在るべ紀ゐ非ざれば、やうやくまして菩提所ゐる嚴山の月輪寺ゐ、埋葬し了りつ、涙の中ゐ三年を經て、早梅若も七歳ゐゐりたりけまむ心を決め、安和二年の春正月、廿九日といふ頃ゐ、件の寺の僧まで頼ミ學問修業の爲ゐとて、登山ゐさせたる後ハ、豆に折ミ音信する ハ。樂ミつ、在りし程に、圓融天皇の貞元元年、春二月の頃ゐとよ、信夫の藤太といへる者、月輪寺まで来りつ、、梅若を誑たて、寺より誘出だたハ、後、隅田川（武藏の）まで連来り、秋田の人内經紀ゐ遇ひたかハ、其處まて直まで談判たハ、梅若を賣らまくなたハ、まそ、梅若心憂苦まで堪へも、頻まで憐を乞ひしかど、藤太ハ更まで聞入れぎ、遂まで無殘や毆打きて、命をさへに斷ちたるき。扨梅若の素生たしも、其後之を仝抱せし忠院阿闍梨などの人より、漸まで知れたるまて、塚に柳を植ゑたるハ、梅若が死期の情愿なり。此時梅若十二歳嚴山まで登りし頃より、凡六年の時といふ。（以上摘要）

右の説、其時代などもや、合ひぬれば、聊信ぜべきふ似たまど、梅若が墓山を出で一時を、圓融天皇乃貞元元年と爲ち、い訝ち。安和二年七歳ふして、貞元元年十二歳といふい、計算違ひたるふ非ずや。（安和い二年にして、天禄と改元し天禄い三年まして天延と改元し、天延も三年ふして貞元と改元ま。）故ふ梅若が死せし齢ぢ十二歳とすまば、頃い天延二年ふり。又貞元元年まで死せしとすれば、其時齢十四歳ふり。何ふまるとも此事のみい、誤りたまといふべきなり。爰まに一の考あり。俗間傳たる説ふ因まむ、梅若が死ぬたる時い、十六歳ふりしといふ。安和二年と七歳とし此説ま従へば、梅若十六歳ふる頃い、正まに天元元年まく、（貞元い二年まして天元と改元ま。）夫より七百五十年い、享保十二年ふ當る。然るに享保十三年、水母寺ふていい梅若の七百五十年忌を爲せり。さらむ一年の相違ふる、其故そも〳〵如何にぞや。唯是むりり疑ちし。○因にいふ、同書まい、信夫の藤太が本名を、田邊

七郎とせり。又隅田川原ふる梅若の墓ふつきていい、洋〻社談まに異説あり。其説の當否まつきていい、今猶考察の最中なれば、爰にいいまだ之ぢ述べぢ。

跋

一篇の文詞は一場の演劇。作者は則役者にして。筆頭のはたらき千變万化。朝幕の息女たちまち切淨瑠璃の治郎となる。是ぞ千兩の役者にして。また千金の作とや言ひむ。かれは道具建あれば、あれ丈文法あり。正面の書劇は主ふして。釣枝は客ふり。座敷のきはは門口あるいおのづから省筆の心と寫ち。衣裳意匠と通ぜまば古きを深めてあたらしく此ふ於てヤンヤの評判記あるべし。はが友蛙船。市川の活眼拭開いて稗史の樂屋を睨み。こさび新狂言と作り出して。少年姿といへる看板を掲げ。興行の初日ふやつがれを招いて見物せしむ。狂言中程ふ至り。たちまち辨當の箸を投ぐて。＝後幕おそるべし。＝といふ事ちかり。

明治十九年、七月をちつかた。凉風吹入る、南窓の下ふて

紅葉山人

香雲書屋藏版書目次

山田武太郎編輯

○新体詞選　全一冊

和讃めのぞ、鞠唄めのぞ、また直譯の臭味を有たず、雅俗折衷の鹽梅よき新作の新体詞を集めさる物なれば、讀で益と愉快とを得べき珍書ふり。

山田武太郎著

○新体詞華　少年姿　全一冊

此書は平田三五郎、白菊丸、上田俊一郎、梅若丸、福壽丸、大川數馬、及森蘭丸等、凡七少年の目覺しき處を叙詠せしと集ちし物ふて、數馬を除くの外は総て皆悲歌なり。故ふ句の艶麗なる中ふ塔凄ふる風を交へ、巧ふ情態を寫出だしたる樣なの〳〵ロ

もて言ふべのらぞ。殊ゑ其終ゑい數件の考証まで備へたり。乞ふ大方の諸君子ふゝて、苟も日本文學を好ゐふ方々い一本を購ふて、其妙味を味ひさまいんことを。

山田武太郎編輯

○續新体詞選

全一冊

此書にい前編よりも猶一層の金篇、玉什を選ミたまぞ、趣向の極めて面白ク、筆法の太く凄き、佳作い勿論、傑作も無ク、ふあらぞ。其上ゑまた最も面白き附言あ了。

山田武太郎著

○續少年姿

前編ゑ亞ぎて、日野阿新丸、楠正行、佐々清藏、山口小弁、堀三十郎ふどを叙詠せしを集めし物ゑて、其文の如何い既ふ前編の

体裁を以て明なれば、故さら丹之を贊せぞ。

山田武太郎著

○新体詞華ひめかゞみ

右い女俠ジャン、ダークの生涯と例ゔ筆もて叙せられしものなり。元来泰西の詩人たちも之を詩歌ゑ詠ぜ丶者最多けゑど、此新体詞華い全く其等と譯し丶物丹あらぞ。別に一已の想像ゑて具ふ委曲を盡くゑ丶なり。今草稿中ふれど、脱稿の日い遠くもあらぞ。

明治十九年七月二十日御届
同　年八月十二日板權免許
同　年十月　日出版

編輯人　東京府士族　山田武太郎
東京神田區鈴木町十六番地

出版人　静岡縣士族　田口高朗
東京神田區今川小路三丁目壹番地

發兌元　香雲書屋
東京神田區今川小路三丁目壹番地

大賣捌　晩青堂
東京神田區同朋町廿二番地

春陽堂　滑稽堂
賣　辻岡屋　大倉書店
捌　吉野喜之助　松月堂
所　開成堂　自由閣
金櫻堂　上田屋

第一段 言節

書見大學

待

陳茶

謝事

KUBOKAWA
小石川久保川書肆

桃園學校文禮

桃醉

西海

醒雅

楊手

洗淡館

對馬

一法師

西海

西海堂主人

松石洞